

インド洋に関する 二つの国際会議について

近藤 治

(一)

昨年、一九八五年はインド洋に関する二つの国際会議に参加する機会にめぐまれた。一つは二月にインドのニューデリーで開かれたインド洋に関する国際セミナーであり、もう一つは八月に西ドイツのシュトゥットガルトで開かれた第一六回国際歴史学会議の「インド洋」部会である。これら二つの国際会議への参加報告を簡単にしておきたい。

(二)

インド洋に関する国際セミナー International Seminar on the Indian Ocean は二月二〇日から二三日までの四日間、ニューデリーの中心部に近いネルー記念博物館兼

図書館で開催された。私は八月の国際歴史学会議「インド洋」部会の報告予定者ということで招待を受け、共催団体の一つである国連大学からの派遣という形で参加させていただいた。その他の共催団体はインド政府科学技術庁、同海洋開発局、ネルー記念博物館兼図書館、ジャワハルラル・ネルー大学、それにパリの人間学研究所である。

ニューデリーに到着したのは二月一六日の未明。空港には追手門学院大学の卒業生で現在国連人口活動基金の職員としてニューデリー赴任中の西村元延君と、外務省に外向して日本大使館に赴任中の国会図書館の堀本武功さんとが出迎えて下さった。セミナーまでには少し日数の余裕があったので、この間は堀本さんの紹介によるホテルで報告文の手入れをしながら準備に没頭した。一九九日の夜、東京外国語大学の水島司さんがホテルに尋ねてこられた。マドラスに滞在中だが、所用でデリーにきているとのこと。水島さんには一九八三年の夏、ロンドンの旧インド省図書資料館でお世話になったところである。セミナーの第一日は二月二〇日午前一〇時から始まった。会場になった建物はネルーが首相時代に使用していたテーン・ムルティー・ハウスで、現在は彼を記念した

博物館兼図書館になっているところだ。木立と芝生と草花からなる広大な庭園には孔雀の群が遊んでおり、都心とは思えぬ閑静さである。建物の入口でいきなりコペンハーゲン大学のニールス・ステンスガード氏と鉢合せとなり、お互いに自己紹介。著書や論文を通して彼の名前はよく知っていたが、対面するのははじめてだった。彼もセミナーの行われる部屋を探していたところで、一緒



に探したところ、それは図書館部の上に当る二階の一角にあった。

受付で登録をすませ、各参加者のために用意された予定表、参加者名簿、タイプ刷の各報告論文、レジュメ集、それに筆記用具一式の入った特別製の手下げかばんを手渡された。国連大学プログラムオフィサーの内田孟男氏が共催団体の代表としてすでに来られていた。しばらくしてセミナーの召集者であり、かつ全体の幹事役をつとめるサティッシュ・チャンドラ氏が夫妻で現れた。チャンドラ氏はジャハルラル・ネルー大学の教授で、国際歴史学会議の理事の一人でもある。彼の名前は *Parties and Politics at the Mughal Court (1959)* の著者としてよくとに有名であり、また彼とは国際歴史学会議の「インド洋」部会に関して書翰の交換を何度か行なっていたが、直接会って挨拶を交わすのは今回がはじめてであった。そのうちにセミナー参加者がつぎつぎと来場して賑かになった。

セミナーの行われた部屋は、中央部に四、五〇名がゆったりと円形に坐れるテーブルが用意しており、その周辺の壁際にも多くの座席が設けてあった。報告予定者たちは円形テーブルの名札が置かれたところに着席する訳

である。参加者名簿に記載された登録者は四六名。このほかに、参加者名簿に記載のない人々の参加もあって、セミナー開催期間中の各セッションの参加人数は一定していなかった。

午前一〇時三〇分、チャンドラ氏が開会の挨拶。つづいて現駐ソ大使のヌールル・ハサン氏の歓迎挨拶があった。ヌールル・ハサン氏はアリーガル大学史学科主任教授として在任中、時のインディラ・ガンディー首相に抜擢されて文部大臣になった人であり、ムガル朝史の研究においても著名な学者である。彼の挨拶の終わったところでお茶が用意され、つづいて最初のセッションに入った。この第一セッションは「環境と文明」という共通テーマのもとに、ムーニス・ラザ（J・ネール大）「インド洋——地理学的展望」、B・アルナチャラム（ボンベイ大）「インド洋航海における港泊発見術——伝統とその海図への応用」、G・S・シャルマ（デリー大学）「北インド洋におけるモンスーン、潮流、資源」の三報告が行われた。それぞれの報告は約三〇分で、報告毎に質疑応答が行われるという形式がとられた。これら三報告はいずれも自然科学と関係の深いものであった。ラザ氏はインド洋の特徴として、(1)文明化した大洋湖、(2)熱帯に位置

する大洋、(3)モンスーン、(4)かつての植民地世界の大洋という四点を指摘し、この世界第三位の大洋が沿岸の人々を分断していたことよりも結合していた点に注目すべきことを強調した。アルナチャラム氏は、自らインド半島中のほとんどすべての港を踏査した経験をふまえて、古来の人々が風、太陽、それに星を利用しながら航路を確認し、間違いなく目的の港に航海していた伝統的技術を地図を示しながら紹介した。またシャルマ氏はインド洋上の三つの海流の存在を紹介し、ベンガル地方から東南アジアへの航行は比較的容易であったが、その逆は容易ではなかったことを述べた。

昼食は裏庭にテントをはったところで、参加者全員が園遊会形式の食事をとった。なかなかの御馳走である。セミナー参加者は、こうして食事時を含め夕方まで連日カン詰め状態のもとにおかれた。

午後のセッションはインド洋沿岸諸地域の文化とその相互関係について、A・B・ラピアン（インドネシア）「インド洋とインドネシア史」、ハルプラサド・ライ（J・ネルー大）「一五世紀におけるインド洋上の中国人」、ジャウエード・アシュラフ（J・ネルー大）「インド洋横断航海を物語る植生上の諸事実」の三報告をもとにし

て議論した。いずれも面白い報告で、たとえばアシユラフ氏の報告ではトマトが一七世紀以後になってインドでも商品作物として栽培されるようになった事実を紹介していた。ライ氏の報告では、中国で「西洋」といえば一五世紀まではそれがインドと西アジア諸国を指していた点をこと新しげに紹介していたが、ここで黙っていたのは日本で東洋史学を学んだ者の恥とばかりに、私は宮崎市定先生の有名な論文「南洋を東西洋に分つ根拠に就いて」を思い出しながら、中国では古くから泉州ないし広東を基軸にして南海を東西両洋に区分する考え方のあったことを指摘した。報告者自身も私の指摘で疑問が解けたようであった。こうして、午後のセッションが終ったのは夕方の六時ごろであった。

セミナー二日目の二一日、午前中は「一五世紀末に至る貿易形態」という共通テーマで、チャールズ・ヴァーリンデン（ベルギー）「インド洋——古代と中世」、L・グナワルドナ（スリランカ）「シエレディバへの海路」、ローティカ・ヴァラーダラジャン「東南アジア貿易へのインド人の参加」の三報告が行われた。私は風邪気味がつづいており、しかも午後には自分の報告も当っているというので、慎重をとってこのセッションは休んだ。

二一日午後のセッションは「貿易形態——一五〇〇—一八〇〇年」の共通テーマのもとに、ニールス・ステンスガード（デンマーク）「インド洋上のネットワークと新生世界経済」、近藤治（日本）「ムガル帝国期の日本とインド洋」、A・ダスグプタ「一五〇〇—一八〇〇年のインド洋史に向けて」、K・W・グネワルドナ（スリランカ）「一七世紀中葉から一八世紀中葉におけるスリランカ・南コロンデル地方間貿易の諸相」、K・S・マシュー（バローダ大）「一六世紀、一七世紀初におけるインド洋上のポルトガル人」の五つの報告がコーヒー・ブレイクをはさんでなされた。

このセッションの報告はいずれもムガル帝国期のインド洋上の貿易に関するもので、私としては大変参考になった。ステンスガード氏はモンスーンが海上の頻繁な往来を却って阻害し、海上帝国の建設をむしる困難にしたとの持論を明らかにし、また私貿易の研究と地金貿易の研究の重要性とを指摘した。私の報告は鎖国前および鎖国中も東南アジアを介して日本とインドとの経済関係が意外に深かったことを述べたものであるが、ダスグプタ氏から倭寇研究の状況と長崎にインド商人が来航していたかどうかについて質問を受けた。一六世紀以前の日本・

東アジアとインド洋を結ぶ海路についても議論された。ダスグプタ氏の報告は一五世紀以降段階を追ってインド洋交易史の特色を概観したもので、一七世紀、とりわけその後半がグジャラート人船主の隆盛という点からいっても重要であるとし、さらに一八世紀になってヨーロッパ船とアジア船との協調が崩れていく過程についても触れた。グネウルデネ氏の報告は北インドのバニア商人に相当する南インドのチェッティ商人の活動に特に注目したものであり、マシュー氏の報告はポルトガル人がインド洋上の航行船に課した通行許可証（カルタス）の制度について詳しく紹介した。

夜にはセミナー参加者全員がインドの副大統領官邸に招待され、R・ヴェンカタラーマン副大統領の歓迎挨拶を受けたあと、庭園に設けられた茶席で歓談した。

セミナー三日目の二二日午前中は、「航行、海運、海図等の技術」と「沿岸諸国の人々の移住と入植」と題した前後二つのセッションに分けられ、前者ではピーター・リーヴス（オーストラリア）「工学と帝国——インド洋の近代海港の建設」、J・コレイア・アフォンソ（ボンベイ大）「西インド海岸に関する初期ポルトガル人の製図」、S・バッタチャリーヤ（J・ネルー大）「一九世

紀初期カルカッタ港における海運業へのインド人の参入」の三報告、後者ではアニルダ・グプタ（J・ネルー大）

「奴隷貿易の抑制とインド洋上におけるイギリスの帝国主義的戦略（一八一五—一八七〇）」、D・H・A・コルフ（オランダ）「インド洋諸国家を一八〇〇年分つ三つの特徴について」の二報告がそれぞれ行われた。このセミナーでは各参加者が交代で議長役を果すことになっており、私はこのうち後半のセッションの議長を務めた。国際会議での議長役ははじめての経験であったが、無事果すことができた。この午前中の報告は、コレイア・アフォンソ氏の報告を除き近代史に関するものである。コルフ氏はもともとムガル朝史の研究者であるが、今回は近代史との接点をもつ報告をされ、多くの議論を呼んだ。グプタ氏の報告もアフリカの奴隷貿易とインド人のモリーリヤスへの年季奉行人制度について述べた実証性の高いものであった。

午前中の報告が盛沢山で時間を予定以上にとつたので、午後は二つのセッションを一つに合して、イマニユエル・ウォーラーステイン（アメリカ）「インド亜大陸の資本主義経済への包摂」、G・L・ボンダロフスキー（ソ連）「ペルシア湾のイギリス湖への転換——一九—二〇世紀

インド洋におけるイギリス支配の不可欠部分として」、およびファーンティマ・アリーカン（オスマニア大）「一九世紀および二〇世紀初期インド洋地帯における帝国主義——東アフリカの場合」の三報告と討論にあてられた。米ソの報告者が並んで報告するので、巨頭会談、などと冗談が出るなかではじめられたウォーラーステイン氏の報告は、タイプ刷六〇頁を超える長大ペーパーを息長の文章で要約しながら、早瀬の如き流麗な口調でなされていき、聞く者を圧倒するような量感を感じさせた。インド史に関する彼の論文はこれが最初のものということであるが、従来の研究史を相当刻明にあとづけただうえで、彼の資本主義世界システム論に取込んでいるところは見事であった。彼の報告をめぐる議論は活発であった。彼はインド人研究者の主張には慎重に耳を傾け、例えば資本主義世界経済へのインドの包摂過程を彼が一七〇〇年からの一世紀間としたのに対して、チャンドラ氏がむしろ一七五〇年からの一世紀間とすべきではないかと指摘したところ、その場でこれを受入れていた。ボンダロフスキー氏とアリーカン女史の報告はともに帝国主義段階におけるインド洋西部への列強支配の展開と矛盾を述べたものである。

セミナー最終日に当る四日目の二三日は、「アジアの再生と開発戦略」という極めて現代的な課題を大テーマに掲げて、二つのセッションが開かれた。一つは「インド洋の資源と沿岸諸国の開発戦略におけるその役割」というテーマのもとに、ザフルル・カーシム（海洋開発局）「インド洋の資源と沿岸諸国の協力」、V・アスタナ（J・ネルー大学）「南極大陸の潜在的鉱物資源」の二報告が行われた。カーシム氏の報告でインド洋沿岸諸国が実に四三カ国もあることを知らされた。もう一つのセッションでは「インド洋平和地帯化の課題」というテーマのもとに、M・ズベリー（J・ネルー大）「全世界に広がる電子戦場」、ラシードウッディーン・カン（J・ネルー大）「インド洋平和地帯化に関する覚書」の二報告が行われ、討議された。

二三日の午後は、国連大学の研究機関の一つとしてインド洋に関する研究センターを設立する構想について、内田氏が説明を行われた。そしてそのあと意見交換もなされた。国連大学のインド洋研究センターについては、オーストラリア政府がその誘致に積極的であり、同国に設立される公算が高いということである。

さらにこのあと、夏のシュトゥットガルトの国際歴史

学会議における「インド洋」部会のもち方について、チャンドラ、ヴァーリンデン、ステンスガード、バッタチャリーヤ、それに私の五人が会場に残り、打合せをした。このときの話し合いによると、シュトゥットガルトでの各報告者の持時間はかなり制限されそうであった。

以上が四日間にわたるセミナーの概要である。最後の日は午後四時半に終了したが、はじめの三日間は連日午前一〇時から夕方六時に至る強行スケジュールであった。しかし昼食やコーヒー・ブレイクのときはとても楽しく、参加者間の親交を深めることができた。また特別の時間を設けて、セミナーの行われたネルー記念博物館兼図書館を見学する機会も用意され、首相在任中のネルーの居室や数々の遺品を目にすることができた。二日目から参加したウォーラーステイン氏とも話合う機会があり、翻訳を通して氏が現在の日本で最もよく知られている歴史家の一人であると持ち上げておいた。彼は当時まだ来日経験がないということであったが、日本語には大いに関心を持っていると話していた。またセミナーで報告はしなかったが会場に来ていた古代史家のロミラ・ターバル女史や、ムガル朝史家のB・R・グローヴァー氏、ベンガル近世史のスシル・チョウドリ氏たちとも話合う機会

があった。

二月二四日は堀本さんの車でジャワハルラル・ネルー大学の広大なキャンパスを案内してもらったり、市内に出たりで一日休息。夕食は西村君の家で御馳走になった。そしてこの日の夜半過ぎ、つまり二五日未明にニューデリーを後にして帰国の途についたのである。まことに慌しい学会参加旅行であった。この間、堀本さんにはニューデリー滞在中のはじめから終りまで随分お世話になった。

(三)

第一六回国際歴史学会議は一九八五年八月二五日から九月一日まで、ドイツ連邦共和国バーデン・ヴュルテンベルク州の州都シュトゥットガルトにおいて開催された。この会議に、私は国際歴史学会議日本国内委員会からの推薦を受けて報告者の一人として参加する機会を与えられたのである。五年に一度開かれる国際歴史学会議に私が参加するのは今回がはじめてであった。シュトゥットガルト空港に降り立ったのは八月二四日の昼前。晩夏のこの町にはすでに日本の初秋の気配が漂っていた。旅行社の手配してくれた車で市内に入り、昼食。ついで会議

の主会場となるリーダーハレに行き、参加者の現地登録を済ませ、そのあと簡単な市内見学も行った。

大会初日の二五日、開会式が午前一〇時からリーダーハレのなかの最も大きなホールであるベートーヴェンザールで催された。私たちは定刻前に着いたが、広い会場は見る間にいっぱいになった。ドイツ歴史家同盟会長、バーデン・ヴュルテンベルク州首相、シュトゥットガルト市長、それにドイツ連邦共和国大統領と、つぎつぎと歓迎挨拶がつづいたあと、ギェイシュトル(ポーランド)国際歴史学会議長の開会挨拶とアールワイラー(フランス)同事務総長の会務報告が行われ、最後にミュンヘン大学のG・A・リッター教授の「社会福祉国家の起源と特質」と題した記念講演が行われた。この間、二度にわたってシュトゥットガルト交響楽団の演奏もなされ、まことに運営の行き届いた開会式であった。英語、フランス語、ドイツ語を自由に操りながらなされた議長挨拶と、専らフランス語一本で通した事務総長挨拶は別として、開催国ということからしてドイツ語が主として使用された開会式となったことは止むをえないとしても、私にとっては甚だ苦痛であり、記念講演の途中でついに席を離れてしまった。

国際歴史学会議が一九〇〇年パリで発足して以来、一貫してヨーロッパ中心の国際会議となってきたことは、従来しばしば指摘されたところである。確かに開会式を見ると、その参加者は欧米人が圧倒的な数を占めている。参加登録者総数二〇〇〇余名のうち、日本から一〇〇名



近くが参加したらしいが、これはアジアからの参加者としては例外的に多いようだ。思うにヨーロッパ人が「国際」という場合、それは何よりもまずヨーロッパ内の国々の境界を越える意味での「国際」であり、しかる後にヨーロッパ外の国々との関係を意味する「国際」が意識されるというように、彼らの「国際」意識は二重構造化しているのではないか。開会式に出席していながら、そんなことを考えた。

第一日の午後から「マックス・ウェーバーと歴史学方法論」と題した方法論部会が始まったが、私には翌日の報告がひかえているため、ホテルに帰って休息した。そして夕方再び外出し、市街中心部に位置する新宮殿（ノイエス・シュロス）で午後八時から行われた州首相と市長の歓迎晩餐会に出席した。この方も会場に入りきれない人々がでるほどの盛況であった。

大会二日目の二六日は「インド洋」部会が開催された日であった。今回の国際歴史学会議では大テーマが三つ用意されており、その一つとして「インド洋」が設けられたのである。部会の会場はリーダーハレの中で二番目に大きなモーツァルトザール。ここで午前九時過ぎから夕刻七時まで、途中午後一時―三時の昼食休憩を除いて、

終日舉行された。この部会については、別稿（『歴史学研究』五五五号、一九八六年六月、所収の参加記）でかなり詳しく紹介しておいたので、ここでは再述しないことにする。ただこの部会の全体状況を伝えるために、現地登録の際に手にしたプログラムおよび報告論文（レジュメ）集によって、報告者とその論題をそのままここに紹介しておこう。

Rapporteur général et Président : S. Chandra(Inde)
Co-Rapporteurs et Vice-Présidents :

- (1) Ch. Verhinden (Belgique) "The ancient period and the middle ages"
 - (2) N. Steensgard(Danemark) "The Indian Ocean network and the emerging world economy c.1500- c.1750"
 - (3) S. Bhattacharya(Inde) "The Indian Ocean in the 19th and early 20th centuries"
 - (4) L. Gunawardana (Sri Lanka)
 - (5) P. Reeves (Australie)
- Contributions :
- (1) TH. Paradooulos(Chypre) "Les influences qui se sont exercées sur l'espace de l'Afrique orientale

- par l'intermédiaire de l'Océan Indien”
- (2) O. Kondo (Japon) “Japan and the Indian Ocean at the time of the Mughal empire”
- (3) J. Kieniewicz (Pologne) “L'Océan Indien en tant que système, XVI^e-XVIII^e siècles”
- (4) J. F. Richards (États-Unis) “Precious metal flow into India: 1200-1500 A. D.”
- (5) H. Kulke (République Fédérale d'Allemagne) “Probleme der Indisierung Südostasiens (1. Jahrtausend n. Chr.). Transoceanische Akkulturation”
- (6) N. F. R. Charlesworth (Grande-Bretagne) “The emergence of the late 19th century multilateral payments system: British-Indian Ocean trade, 1850-1880”
- (7) G. L. Bondarovsky (U. R. S. S.) “Pattern of British domination during the 19th century”
- ただしハッタチャリーヤ氏が欠席したので、その報告論文をグナワルダナ氏が代って紹介し、併せて彼自身のレポート “Seaways to Sialida: Changing patterns of navigation in the Indian Ocean and their impact on precolonial Sri Lanka” も報告した。

プログラム上の記載とは違って、私の報告は最後から三番目だった。約三〇分の持ち時間を使って、私は自分の用意してきたペーパーの要点をできるだけ明瞭に報告するように努めた。その結果がどうであったか、これは部会の参加者に判断していただくより仕方がない。その参加者たちは、私の予期に反して多くはなかった。報告時に壇上から見ると、階段状のホールには空席が目立っていた。インド洋という、ヨーロッパ世界の外に位置する地域を対象にしたこの部会の参加上況には、上に触れたヨーロッパ人の「国際」意識があるいは反映されているのかもしれない。がともかくも、私は報告の責任を果して一安心。部会が終ったあと、市庁舎(フートハウス)地下の食堂において、日本国内委員会の世話役を長年やっている西川正雄氏はじめ何人かの方々に労をねぎらっていたいただいたのが心にしみてありがたかった。

「インド洋」部会の参加者は確かに多くはなかったが、午前中のヴァーリンデン氏やステンスガード氏らの共通課題報告が多くの問題領域をカバーしており、部会としては比較的よくまとまりのあったものでなかったかと思う。これも、二月のニューデリーにおけるセミナーに部会参加者の多くが出席しており、それが一種の予備セシ

ナリ的な役割を果していた結果であろうと思う。

二七日は、大阪空港出発以来ホテルも一緒になった前甲南大学学長の杉原四郎氏とその令息で関西大学助教授の杉原達氏とが南の大学町テュービンゲンへ行かれると、妻と同行させていた。往きはバスで一時間余、森や野を抜けていく沿道が素晴しく、ナナカマドの実が鮮かな朱に色づいていた。ハイデルベルク大学につづいて古いこの町の大学はかつてヘーゲルも学んだところ。ドイツ語の上手な達氏と、町で会った親切な女子学生のおかげで、大学図書館の書庫にも案内され、数々の稀覯本も見せていただいた。また市内の高台にある旧城趾や、ネッカー河畔のヘルダーリン旧邸も探訪できた。帰りは汽車。この日も夕刻八時からシュトゥットガルト大学総長主催のレセプションがあったが、この方は欠席した。

二八日は午前中の円卓会議「ヨーロッパ近代思想におけるアジア像」に出席。この円卓会議の組織者は小谷汪之氏であった。円卓会議というには会場があまりにも大きすぎたが、しかし小谷氏は明解に自分の論点、主として土地国有制論および村落共同体論と結びついたヨーロッパ人のアジア像とその批判を提示し、討論の呼び水役

を果された。そのためか参加者数の割には議論が活発で、発言に時間制限が加えられた程であった。ヨーロッパにはもっと別のアジア像があったのではないかという意見に対して、私も発言を求め、小谷氏の提示したアジア像が実はヨーロッパを中心にした近代世界の形成期に作られ、根強く残ってきただけに、こうしたアジア像の批判的検討は必要であるといつて小谷氏の主張を擁護した。では逆にアジアの方でどのようなヨーロッパ像が展開したのかという議論も出て、再び発言する羽目となったが、アジア諸文明圏の人々の先進意識、毛唐観を思いつくままにしゃべったにとどまり、この方は我ながら説得的とはいえなかった。円卓会議が終ったあと、出席者の一人でハンブルク大学において哲学を講じているというユルゲン・ダイニンガー教授が私のところにやってきて、アジア諸文明圏の人々をもつ先進意識というが、例えば古代ギリシアにあったような民主主義の考え方がアジアにはあったのだろうか、と質問されたのには困ってしまった。一体、近代以前のアジアにおいて、民主主義の考え方はどのように育まれたのであろうか。確かに大きな課題である。

二八日の夜は、ベートーヴェンザールで行われたシュ

トゥットガルト交響楽団の演奏会に出た。D・C・ウォ
ルム指揮で、ベートーヴェンの交響曲第五番「運命」は
じめ、三曲が演奏された。本場ドイツの素晴らしい音楽ホ
ールで、本場の演奏を聞けるのはまことに幸運であった。

二九日はハイデルベルクへのバス旅行。途中ネッカー
川を船で約一時間下った。大学と街並とが一体となった
街中を巡り、古城から対岸の小山にある「哲学者の道」
を望見した。三〇日もバス旅行に加わり、今度はスイス
との国境地帯にあるコンスタンツ湖（ボーデンゼー）に
出かけた。途中ルネッサンス期のハイリンゲンベルク城
を見学したりして、湖畔の町メールスブルクで昼食。フ
ェリーで対岸のコンスタンツにも渡った。帰路は車窓か
ら、シュワールベン地方の森を拓いて縦横に建設されつつ
あるアウトバーンに眼を瞠った。

三一日は午前中、時代別部会のうち近代の「ヨーロッ
パとアジアの絶対王政」部会に出席した。この部会はイ
ンドのヌールル・ハサン氏が責任者で議長役を務め、自
らも「インドのムガル王政」という報告を行なった。日
本からは津田秀夫氏が「日本封建解体の特質」と題し
た報告を行なった。私はこの部会でアジアやヨーロッパ
の近世絶対王権、独裁君主制の特質の比較検討が行われ

るものと期待していたが、日本側の報告は明治絶対政権
の形成に力点をおいており、時代認識が報告者間で全く
ずれていて深い議論とならなかったことが至極残念に思
えた。またこの日の午後は、同じく時代別部会のうち現
代の「一九四五年以降の政党・世論・国防問題」部会に
出席した。この部会では日本から佐々木隆爾氏が「日本
における高度経済成長政策の起源とアジア諸国」と題し
た報告を、日本史研究者とは思えぬ違者な英語で発表さ
れた。

最終日の九月一日は午前中に閉会式が行われた。会場
は開会式と同じリーダーハレのベートーヴェンザール。
出席者は開会式のときほど多くはなかった。次回は五年
後にスペインで開催されることが紹介された。また中国
がアジアから六番目の加盟国として国際歴史学会議に加
盟したことも紹介された。この閉会式でもシュトゥット
ガルト交響楽団の演奏があり、ハイドンの交響曲第四五
番「別れの交響曲」が静かに奏された。

以上が私の体験を中心にしてまとめてみた国際歴史学
会議の参加記である。「インド洋」以外の部会でなされ
た報告やその参加記などは、上に記した『歴史学研究』
五五五号に収載されている。またこれに先立って同誌五

四三号（一九八五年七月）には、西川正雄氏の「第一六回国際歴史学会議（一九八五年八月）について」という文章があり参考になる。その他に私が目にした参加記としては、「マックス・ウェーバーと歴史学方法論」部会を中心にして詳しくまとめられた杉原達氏の「第一六回国際歴史学会議に出席して」（関西大学『経済論集』三五巻六号、一九八六年三月）と、杉原四郎氏の「シュッツトガルトの向日葵」（『電波新聞』一九八五年一〇月三一日）および「国際歴史学会議のことども」（『経済資料研究』一九号、一九八六年六月）、西川正雄氏の「対話の経験積み重ねよう——第一六回国際歴史学会議から」（『毎日新聞』一九八五年一月二〇日夕刊）がある。

九月二日午前のシュトゥットガルト——フランクフルト間の空路では、「マックス・ウェーバーと歴史学方法論」部会で報告された斯波義信氏と偶然一緒になり、運よく氏の便と妻の帰国便とが同じであったので、大阪までの同行をよろしくお願いして、私はフランクフルトから別便でロンドンを再訪した。そして大英図書館とロンドン大学東洋アフリカ学部で数日調査して、九月八日に帰国したのである。

（四）

以上、インド洋に関する二つの国際会議に参加した様子であらまし述べた。国際歴史学会議の方では、「インド洋」部会以外のことについても触れておいた。

二つの国際会議で活躍していた西オーストラリア工科大学のピーター・リーヴズ氏から、帰国後同大学より刊行されている『インド洋ニューズレター』が届けられるようになった。同誌の最新号によると、西オーストラリア工科大に国際インド洋研究センター (International Centre for Indian Ocean Research) が一九八六年中に発足する予定であるということである。内田氏の私信によれば、国連大学の構想するインド洋研究センターの方は必ずしも順調に進んでいるとはいえないようであるが、右の国際センターの発足が国連大学の構想に弾みをつけることは確実であろう。そして今後は、インド洋に関する各種の研究が一層注目されていくものと思われる。そのような研究の方向にとって、私がいずれにも参加する幸運に恵まれた一九八五年のインド洋に関する二つの国際会議は、大きな意義と役割をもつものであったということができらるであろう。